

会員の声：「感動を創造する、1対1のおもてなしを目指して」

おもてなしとは「歓待する」ということです。当社では常にお客様の立場に立って物事を考え豊かな感性を育み創意工夫を続けようと日頃からスタッフと話をしています。けれどこういうことを経営者から一方的に押しつけられたのでは従業員も楽しく仕事は出来なんでしょう。言われてからやるのではなく従業員が主体的に行動する・・・その為には従業員が今の仕事に誇りを持ち、喜んで働かなくてはなりません。従業員が今の仕事にプライドが持て、自分が努力することで会社やお客様が認めてくれる。だからお客様が来てくれるのが嬉しい・・・そういう関係が築けてこそ心からお客様に「ありがとうございました」と感謝できお客様からも「ありがとうおいしかったよ、楽しかったよ」という打ち返しが頂けるものだと思います。これまでは「商品力、サービス力、店舗力」の3つが重要と言われましたが、近年では「おもてなしの心、雰囲気」のふたつも大きな要素として注目されています。このどれもが欠けてもいけない。全てを備えた店で無ければお客様に伝わっていかないのです。お客様一人一人に真剣勝負、味もサービスも怠れないという気持ちがお客様の感動を呼ぶのだと信じてやみません。「食」という字は“人を良くする。”と書きます。これは医食同源という意味のほかに、食べる人、作る人、もてなす人という関係を通してお互いの心を温めあう作用のことも指しているのではないのでしょうか。当社ではお客様の感動と従業員の感動を重ね合わせこれからも気持ちのいい「飲食とサービス」のハーモニーを奏でていきたいと思っています。T.S

4月13日例会：移動例会 社会奉仕事業「新潟オートリサイクルセンター」見学会

反省会 於三条ロイヤルホテル午後6時30～

4月20日例会：「ロータリー雑誌月間」

卓話「警察人生を振り返って」前新潟県警察本部交通部長 渡辺 守様



Lend a Hand

会長/山本 賢

幹事/西山 斉

SAA/小林 繁男

三条北ロータリークラブ週報

手を貸そう

例会日

2004. 4. 6

累計 No 845

当年 No 38

国際ロータリー会長 ジョナサンB.マジアベ 第2560地区ガバナー 原 信一
ホームページ <http://www.rotary2560.net>

例会日/火曜日 12:30～13:30

例会場/三条ロイヤルホテル TEL34-8111 FAX34-8114

事務局/三条市西四日町3-15-34 ヒューマン・ハーバー内

TEL35-7160 FAX33-8972

メールアドレス north@sanjo-nrc.org ホームページ <http://www.sanjo-nrc.org>

行事： 新入会員卓話 本間重満会員

新入会員入会式

出席： 本日の出席 60名中 44名

先々週の出席率 60名中 49名 81.67% (前年同期79.66%)

先週のメイクアップ： 4月2日 3RC会長幹事会 斎藤 正さん、小林 満さん

3日 五十嵐川クリーン参加(敬称略) 青柳康博、阿部勝子

石川友意、今村 泉、小林繁男、笹原壮玄

佐藤弘志、佐藤義英、外山晴一、中條耕二

西山 斉、西村 護、淵岡 茂、本間重満

丸山達夫、山本 賢、米山キクエ、米山忠俊

ゲスト： なし

ビジター： なし

会長挨拶： 山本 賢会長



今日は皆様もよくご存知のジャーナリスト櫻井よしこ氏と評論家松本健一氏との対談を元に話させていただきます。櫻井氏は長岡高校の出身でもあり、長岡高校は小泉首相の「米百表」発言で有名になった小林虎三郎の「国漢学校」の後身であり、山本五十六の出身校でもあります。そんなことから長岡藩について以下のように対談されています。

長岡藩には旧き良き、尊敬すべき伝統があったといえます。例えば、長岡藩の藩士達は、人の上に立つ者は自ら律しなければならない、下にいる者を思いやらなければならないと考えられており、その証の一つに、新米は生涯口にしなかったそうです。当時は給料をお米でもらう時代でお米の比重は非常に高く、それを口にするのはもってのほかだと思っていたのです。

戦後のある時期までは、「侍の教育」がしっかり残っていて、長岡藩には「四木」という考え方があり、どこの侍の家にも4つの木(梅、柿、栗、杏)を植えたそうです。これらは保存食になるので、いつ何が起こっても常に大丈夫のように準備をしていたのです。これは長岡藩の規範、心構えだったのです。

幕末という時代は遅れた時代であると考えがちですが、実はある意味では今よりもはるかに世界情勢に敏感だったといえます。河合継之助の話でいえば、明治政府軍にも東北列藩同盟にも加わず、「中立」という言葉を使いました。中立という言葉は江戸時代まで使われておらず、また中立が有り得なかった時代にです。しかし、なぜ河合継之助がこの言葉を使ったかというと、当時の国際法である『万国公法』の中に「局外中立」という言葉があったからです。これは、どちらにも加わらない場合には、戦争に参加しないだけでなく、どちら側にも兵を出さない、物を売らない、ということです。つまり、当時の長岡藩は世界常識と日本の常識を比較、選択する判断材料をもっていたということです。

明治の半ば頃までは「武士道」というものが残っていました。ところが陸軍幼年学校で入学者の採用を始めた時、学力のみを基準とし、人間としての資質は問いませんでした。武士の子であれば私欲を潔く捨てられるか、いかに下の者を守れるか、といった試練を常に課せられていますが、学力だけを重要視され選ばれた人達が点数の序列のまま重要なポジションに就けられていったことが、昭和の戦争の失敗に繋がったと思います。

以上のような対談記事を読み、長岡藩のような歴史的背景は今の時代にも必要だと思いました。新しいものを取り入れつつ、1度立ち止まり振り返ることも大切であり、これからは激しく古い時代が整理され、また激しく新しい時代が創られていくのではないのでしょうか。

幹 事 報 告： 西山幹事

- ・次週13日は「新潟オートリサイクルセンター」見学会です。通常の例会はありません。
 - 13：30旧まるよし本店並び駐車場前出発
 - 18：30～反省会 三条ロイヤルホテル
- 反省会のみ出席も歓迎致します。又いつものように記帳の用意もありますのでご活用下さい。
- ・「イラクの子供達に毛布を送る」運動の要旨を配布してあります。先回理事会で承認頂いたようにクラブとしての協力はできません ので個人でご協力いただける方は事務局まで申し出下さい。
- ・にいがた緑の百年物語緑化推進委員会より 平成16年度「緑の募金」協力についてお願い
- ・11日(日)は地区協議会です。該当委員長さんは宜しく申し上げます。8：30三条市役所出発です。
- ・三条商工会議所より 企業防衛特別セミナーのご案内（配布）
 - 日時 4月23日（金）10：00～18：00
 - 会場 中小企業大学校

ニコニコボックス：	6日現在累計 919,000円
-----------	-----------------

- 馬場直次郎君 春は素晴らしい季節です。健康の為に大いに外へ出かけるよう心掛けるつもりです。
- 今井克義君 村の渡しの船頭さんは、今年60のおじいさん、年は取っても鱸をこぐ時は元気一杯鱸がしなる。それギッチラ ギッチラ ギッチラン。あと4日で60です。もう、どこもしなるところはなくなりましたが、又元気に頑張ります、宜しく。
- 淵岡茂君 長男高校入学しました。しばらく親の責任で卒業までお付き合い。長男に期待してBOXへ。
- 岡田健君 今朝会社の前の高圧鉄塔の上に作ったカラスの巣を取りのぞくために工夫が登っ

え船をくれるかい。」木は言った「私の幹を切り倒し船をお造り。それで遠くへ行けるでしょう・・・そして楽しくやっておくれ。」そこで男は木の幹を切り倒し船を造ってしまいました。木はそれでうれしかった。長い年月が過ぎ去って男がまた帰ってきた。木は言った「すまないねえ、ぼうや私には何にもない、あげるものは何にもない、りんごもないしー」「わしの齒は弱くなってとてもりんごはかじれんよ。」「ぶらさがって遊ぶ枝もないしねえー」「年寄りだから枝にぶら下がるなんてむりなことだよ。」「幹もないから登れないしねえー」「とても疲れて木登りなんて、／＼」木はふっとため息ついて「すまないねえ、何かあげられたらいいんだが。私には何にもない。今の私はただのふるぼけた切り株だから・・・」いまやよぼよぼのその男は「わしはいまたいして欲しい物はない。座って休む静かな場所がありさえすれば、わしはもう疲れはてた。」「ああそれなら」と木は精一杯背筋を伸ばし「この古ぼけた切り株が腰かけて休むのに一番いい。さあぼうや腰掛けて。腰掛けてやすみなさい。」男はそれにしがった。木はそれでうれしかった。

はい、目を開けて下さい。あとがきがあります。「与える」ことは人間の能力の最高の表現なのであり、「与える」という行為においてこそ、人は自分の生命の力や富や喜びを経験することになると考える。1本のりんごの木はこの主張そのままに1人の友達に自分の肉体をけずって、木の葉を与え、果実を与え、枝を与え幹を与え全てを与える。母性愛さながらにー。しかもここでもっとも重要かつ微妙な問題はこの「与える」行為に犠牲の行為を見てはならないという一点であろう。犠牲には悲観的な感性がつきまとうのが常であるが、りんごの木がただひたすら喜びだけを見いだしたことに読者は注目すべきである。すなわち作者にとっても「与える」ことはあふれるような生命の充実を意味しているのであって、犠牲的喪失を意味しなかった。こうして一箇の切り株になってもなお「与える」ことを忘れないりんごの木に言い知れぬ感動があるならその感動こそ「犠牲」ならぬ真の「愛」のもたらすものにほかならないのである。とあります。

私がこの本を読ませていただいた訳ですが、今から約20年前にあるセミナーに参加した時にこれを読んで頂きとても感動したことを今でも覚えており卓話に使わせていただきました。

なぜ与えるということを話したかったかという、私は1月6日に入会させていただきました。入会を勧められたとき、「え、おれのような人間がそんな大それた会に入会なんかしたら大変なことになる」だからとお断りしようと思いましたが、そんなことはないそれで私も52歳過ぎましたので社会勉強もっともっとやらなきゃあダメだなと思い入会させていただきました。最初の例会から3・4回目位まではなんかきこちなさを感じておりました。回を重ねるごとに会場に来ると「こんにちは／＼」ゴルフ行ったかね。なにねえ。みたいな。1月の新年会に参加しました。ゴルフ同好会にもいれさせてもらいました。その時々皆様から温かいお言葉を掛けて頂きうれしく思いました。入会から3ヶ月経過致しました。今では火曜日が待ち遠しい。皆様と楽しい会話ができおいしいお昼にもありつける。これが私の楽しみになっております。そして勉強させて頂いた事を会社でも家庭でも活かしたいと思います。

私は新米でございますが5年10年あるいは20年と経過したあかつきには後輩の皆様に「与えたい」「与え続ける」ことをお約束し本日の卓話とさせていただきます。
ご静聴ありがとうございました。